

第一次世界大戦下のアメリカでみられた ドイツ鯉の表象

山元 里美[†]

The Representation of German Carp in America in World War One

Satomi Yamamoto[†]

Abstract : The article examines the political and social conditions as well as the historical background of how German carp were anthropomorphized as German immigrants in the United States. In doing so, it first reviews the literatures of critical media studies and propaganda studies. Second, it traces the historical evolution of German carp dispute between the 1880s and 1910s, and it points out that the fish once considered as valuable were devalued by the early 1910s. Third, it shows how German-Americans and German permanent residents were treated in the United States during World War One. Fourth, it analyzes newspaper coverage of War on German Carp, and it argues the media representations of German carp were used to justify the U.S. war entry.

Key words : fishery disputes, German carp, German immigrants, nature conservation, the United States of America, World War One

はじめに

1929年にW. M. SmallwoodとM. L. Smallwoodは「ドイツ鯉、招かれた移住種」(“The German Carp, an Invited Immigrant”)という論文の冒頭で、アメリカの「イミグラント」(immigrant)について次のような問題提起をしている。

20世紀アメリカ思想の中で、移民は重要な位置を占めている。[アメリカ議会の]議員らはそれぞれの移民集団からのプロパガンダに悩まされている。しかし、外来動物が頻繁に[アメリカの]経済危機をもたらしてきたにもかかわらず、一般市民の目は外来動物に向けられていない¹⁾。

Smallwoodらが指摘するように、イミグラントと言う場

合「移入者」を念頭におくことが多く、昆虫、植物、動物、魚介類などの「移入種」を対象に考えることは少ない。ところがアメリカの外来生物には、ベルギーウサギ(Belgian hares)、イギリス雀(English sparrows)、マメコガネ(Japanese beetle)と、移入先の国名が外来種を表す際に使われている場合が多い。

この点に関しては様々な見解がある。例えば、Shinozuka(2013)は「侵略者としての日系移民」(Japanese immigrants as invaders)というメタファーが、1910年代のマメコガネの襲来と日系二世への世論をリンクさせる作用があったことを明らかにした^{2, 3)}。マメコガネに「日系」というナショナルリティを付与し、あたかも日系人であるかのように擬人化することことで、アメリカの生態系を荒らす外来生物(alien)と、白人文化とその価値体系を揺るがす日系移民の流入とを連想させ、日系人がアメリカ社会へ

の脅威だという国民感情を掻き立てたと論じた⁴⁾。つまり、動植物を擬人化する行為にはマイノリティ集団を人間社会から排斥しようとする意識だけでなく、マイノリティを非人間的に取り扱ってきたアメリカの歴史をも表しているのである。

人間と外来生物の移住の歴史の接点は、1920年代と1960年にピークがみられると環境史家のCoates(2006)は述べている⁵⁾。この2つの時期は1924年移民法と1965年移民法が制定された時期と重なる。1924年移民法では、東欧、南欧、アジア地域からの移民者数を制限するために出身国別の割当制度が導入された。1965年移民法改正では、出身国別の割当制度を撤廃し、特別な技能を持った移民を積極的に受け入れ、アメリカ市民と永住滞在者の家族を呼び寄せることも可能にした。Coatesは移民法改正の時期と外来種移入の増減の時期が重なるのは偶然の一致であろうと述べてつづき、「人ではないもの(nonhumans)の論争と同様に、人間の移住者も移民の栄光・望ましい移民と、移民の脅威・望ましくない移民という枠組みに当てはめて論議される」ことから、動植物の表象する行為と、移民に対するアメリカ人の態度は何らかの形で連鎖していると指摘した⁶⁾。

今日のアメリカ社会にも動植物を人種・民族化する動きは見られる。例えば、2000年代にアメリカ中西部を賑わせたアジアゴイ(アジア鯉)である。アジア鯉とは中国から移入された鯉の総称でコクレン(*Hypophthalmichthys nobilis*)、ハクレン(*H. molitrix*)、ソウギョ(*Ctenopharyngodon idella*)、アオウオ(*Mylopharyngodon piceus*)が代表的な種である。それぞれの鯉の移入時期と移入者は異なるが、有害侵略外来種として問題になっているコクレンとハクレンは、1973年にアーカンソー州の養殖業者が水質浄化目的でアメリカに移入したのが始まりだと言われており、1977年にはアラバマ州、アリゾナ州、アーカンソー州、イリノイ州、テネシー州でもコクレンとハクレンが導入された⁷⁾。1990年代の洪水によって、養殖施設で管理されていたコクレンとハクレンがミシシッピ河やイリノイ河に逃げたと言われているが、アメリカ国内でこれらの種の鯉を大量生産した形跡はなく、たまたま逃げたのか、それとも故意に放流されたのかは定かではない⁸⁾。2000年代半ばになると、コクレンとハクレンがミシシッピ河とイリノイ河を北上し、ミシガン湖に到達するのではないかと、アメリカ国内で騒ぎになり、2013年にアメリカ政府は、ミシガン湖の生態系を守るためにアジア鯉管理戦略フレームワーク(Asian Carp Control Strategy Framework)を考案し、2億ドル

の公的資金を充ててアジア鯉の駆除活動を行うことを決定した⁹⁾。

この騒動の中で、鯉の種名ではなく「アジア鯉」という総称がネットメディアを含む新聞、テレビ、雑誌で頻繁に使用された。「アジア鯉の侵略」(The Asian Carp Invasion)¹⁰⁾や「アジア鯉と戦え」(Fight Against Asian Carp)¹¹⁾という取り上げられ方は、世論を煽動する行為のようにもみえた。Brummel(2011)がミネソタ州で政府関係者と非政府組織団体に聞き取り調査を行ったところ、アジア鯉の流入を防ごうとする運動は自然保護目的だけでなく、アジア鯉がミシシッピ河上流域の生態系を崩壊するかもしれないという脅威が、自分たちの存在をも脅かすという解釈につながり、湖文化というコミュニティ・アイデンティティを強化することにつながったことを明らかにした¹²⁾。

このようにアジア鯉に対する反感が高まるなか、アジア鯉という名称がアジア系の蔑称に使用されているとして、ミネソタ州上院議員Hoffman(2014)が州内での使用禁止を求める法案を提出した。この法案は2014年5月に上院で可決し、5月下旬にはミネソタ州知事が署名して成立した^{13,14)}。この法律により、ミネソタ州自然資源局では「アジア鯉」ではなく「侵略鯉」(invasive carp)という言葉を使用することが義務づけられた。この騒動の背景には、アジア地域からミネソタ州へのニューカマーが増加したことも影響していると考えられる。近年のミネソタ州には、ラオスからモン族が大量に移住してきた¹⁵⁾が、1970年代頃に移り住んで来たインド系・中国系移民は経済的に成功した者も多く、ミネソタ州の経済構造の一部を支える重要な存在になっていた¹⁶⁾。このような地域社会の情勢のなか、政治性のない鯉をアジア系と人種・民族化することで、反アジア感情を受け止めるバッファゾーンとしての役割があるとも推察できる。

ところが、動植物を国民感情のバッファゾーンとして使用するのには、マイノリティ集団に限られたわけではない。戦争などの政治的混乱期には、主流派であるホワイトエスニシティの集団でさえも排斥の対象となった。本稿では、1880年代から1920年代の新聞でのドイツゴイ(ドイツ鯉)の表象を取り上げ、鯉をドイツ系住民のように擬人化し、アメリカ国内の反ドイツ感情とアメリカのナショナリズムを高めるように表象されていたことを明らかにする。

1 戦時下のメディアによる敵国民の人種・民族化

テレビ、新聞、雑誌などのマスメディアには、視覚情報と言説に特定のメッセージを付与した上で、そのメッセー

ジを一般大衆に広める機能がある。これは現代社会だけに見られる傾向ではない。マスメディアが存在しなかった時代でも、例えば美術画の中に、黒人のように周縁化された人物像が描かれていたことが多々みられ、その時代の人種主義を探る上での重要な手がかりとなる。Nederveen Pieterse (1992) は、13世紀から20世紀の欧州で出版された諷刺画、絵画、ポスター、写真を人種主義という観点から分析し、アフリカ系住民やアフリカ人が、欧州の大衆文化の中で他者として描かれ続けられた歴史を明らかにした¹⁷⁾。黒人をステレオタイプ化し続けてきた歴史が、人種主義という形でヨーロッパ社会に現れ、そして人種主義という社会的現実を大衆が実際に経験することで、黒人に対するステレオタイプがさらに強化されるという仕組みがあると考えられるのである¹⁸⁾。つまり、美術画には人種差別意識を間接的に高める機能があったのだ。

現代の西欧社会では、美術画に取って代わりマスメディアが、人種主義を広める上での強い影響力がある。Hall(1997[1981])はマスメディアを「人種に対する考え方を明確化し、操作を行い、変化させ、精査する場」¹⁹⁾として定義した。しかし、マスメディアが一方向的に人種主義言説を広めているわけではない。Hall(1997)によると、人種主義言説は報道スタッフの個人的心情に依拠しているのではなく、さまざまなステークホルダーの考えや思惑が複雑に交錯した形で伝えられていると論じた²⁰⁾。例えば移民や黒人を、テレビや新聞で時事問題として報道することは、彼らの存在自体が社会問題であることを暗に示唆していることになり、この行為は「推論的人種主義」(inferential racism)の一種であるとHall(1997)は述べた²¹⁾。

Hallはイギリス社会を事象に取り上げているが、アメリカ社会でも同様の傾向が見られる。Chavez(2001)は1965年から1999年のNewsweek誌やTime誌を含む10種類の大衆誌の表紙に描かれた移民や難民を分析することで、1990年代のアメリカで見られた反移民感情や人種主義の火種が1960年代頃には既に存在していたことを明らかにした²²⁾。フィクションによる絵画ではなく、事実に基づいた写真を表紙に大々的に掲載することで、白人文化に基づいた伝統的アメリカ社会像が、新移民の流入によって着々と変化していることを、一般大衆に伝える機能があったのである。

マスメディアを媒介した形で広められる人種主義は、戦時下では特異な形で現れる。自国民の結束力を強め、国内の士気を高めるために、新聞や雑誌では敵国民を罵倒する言説、差別意識を露にした表現や表象などが多々見られる

ようになる。例えば、Bernays(1942)は第一次世界大戦中のドイツ、イギリス、アメリカが新聞、雑誌、無声映画を利用することで、自国に有利なように参戦を正当化しようと世論を操作していたのを明らかにした²³⁾。1914年のイギリス軍は志願兵を募るために「国は君を必要としている」(Your Country Needs You)というスローガンを掲げた²⁴⁾。一方、第一次世界大戦の終戦直後のドイツでは、von Hoensbroech(1919)が「イギリスの獣」(The English Beast)というパンフレットを出版し、その表紙には地球を手中に収めるダイオウイカを描き、ダイオウイカをイギリス帝国に擬えた²⁵⁾。

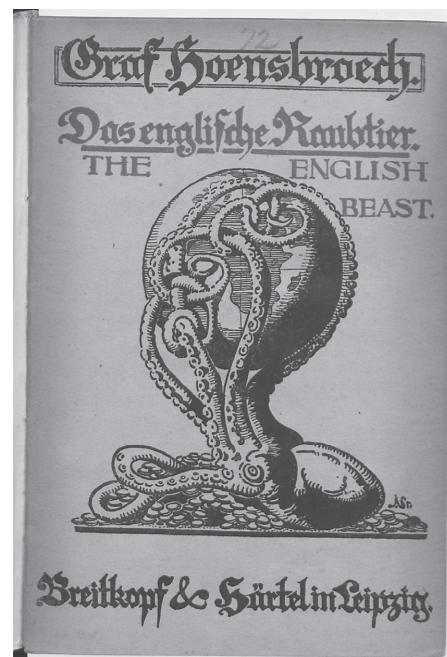


図1 「イギリスの獣」というタイトルのパンフレットの表紙(大英図書館)から転載)

第一次世界大戦の参戦国は、武器だけでなく情報操作も戦争を有利に導く上では重要なことに気づいていた。この知恵は、スペイン内戦(1933-1936)でも引き継がれていた。Riberio(2014)はスペイン内戦でラジオが戦争プロパガンダを伝播する手段として利用され、これをヒントに第二次世界大戦でも大衆を煽動する手段として利用されたことを指摘した²⁷⁾。そしてベトナム戦争(1955-1975)の頃になると、真実を伝えることを信条とするジャーナリストの写真の中から、どの写真が選ばれて世間に広められるかという、選定の政治性を視野に入れることの重要性をGriffin(2010)は論じた²⁸⁾。客観的事実を伝えているように見える写真だが、戦争プロパガンダのメッセージが隠れているのである。

このように、メディアには愛国心を高揚させる機能だけでなく、敵国民と自国内の敵性住民に対する嫌悪感、拒否感、差別意識を高め、彼らを悪の権化として表象する機能までもあると推察できる。

戦時下に敵国民を人種・民族化する傾向があることを念頭におき、1876年から1946年までの the Alton Democrat 紙や Harrisburg Telegraph 紙に掲載されたドイツ鯉の記事数をプロットしたところ、掲載数のピークは3回現れた(図2)。

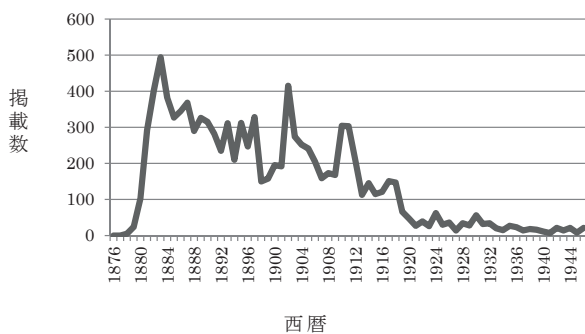


図2 ドイツ鯉の記事の掲載数の推移, 1876年—1946年

1回目のピークは1883年であり、495記事が掲載されていた。その内容は鯉養殖場の運営方法、鯉の育て方、アメリカ漁業・魚類委員会(The United States Commission of Fish and Fisheries, 以下USFC)による鯉の稚魚の流通、巨大な鯉の漁獲に関するものだった。2回目は1902年である。この年には415記事が掲載され、ドイツ鯉の市場価格、ドイツ鯉の需要、ドイツ鯉のメニューに関する内容が載っていた。一方、河川からドイツ鯉を駆除する活動についても掲載されていた。3回目は1910年で304記事掲載されており、ドイツ鯉が在来魚の生態を崩す要因だとの批判、カンザス州で鯉養殖を広めることに力を注いだ自然学者のDycheに対する批判、ドイツ鯉の養殖を推進したアメリカ国会議員の責任追求などがみられる。

第一次世界大戦期である1914年から1918年の間に掲載されたドイツ鯉の記事の数は、他の期間と比較するとその数は少ない。しかし、この時期の特徴としてドイツ鯉をドイツ人に擬人化し、第一次世界大戦のプロパガンダとして利用されているのがみられる。さらに、詳しくみると、1917年と1919年にそのような記事が集中していた。「War on German Carp」との表題のある記事は22記事で、1893年から1932年の間にみられた。

1914年から1921年間の記事をみても、同じ内容の記事が期間をまたいで、複数の新聞紙で掲載されていた。新聞の編集担当者が重要と判断したために重複が生じたの

か、それとも読者のニーズに応えようと他紙から転用されたのかは定かではない。さらに、引用元が記載されていない場合が多かった。また、同一記事を複数週に渡り掲載する新聞もみられた。このことから、図2で示された数字は記事の掲載回数であって、記事の内容の数ではない。しかし、当時のアメリカ人の関心事項であったことは否めない。本稿では複数紙に掲載された記事を取り上げた。そのほとんどは紙面を大きく割かれた記事ではなく、紙面の片隅に載っていることが多かった。そして、記事の内容を精査したところ、中西部地域の新聞にドイツ鯉を擬人化し、諷刺または蔑視する記事がみられた。

2 「救済種」から「害魚」への転落

まず、ドイツ鯉の「鯉」としての歴史的経緯を整理する。ドイツ鯉がアメリカに移入された時期は、個々人が勝手に持ち込んだ場合も考えられるので、正確な時期はわからない²⁹⁾。1769年のヴァージニア州で鯉が獲れたとの日記もあれば、1832年の科学雑誌にはフランスで鯉を購入しアメリカに持ち帰ったとの記録もある³⁰⁾。さらに、1872年8月にPopper(1875)がドイツから6匹の鯉をカリフォルニア州ソノマ郡に持ち帰り、池で養殖することに成功していた³¹⁾との記録もある。

ドイツ鯉は少なくとも leather carp (*Cyprinus carpio var. nudus*), mirror carp (*C. carpio var. specularis*), scaly carp (*C. carpio communis*) の3種類にわけられる(図3)³²⁾。ところが、1870年代から1930年代までのアメリカの一般紙を調べると、leather carpの記事は283記事、mirror carpは182記事、scaly carpは203記事だけである。ドイツ鯉に関する記事が10,242記事であるのを考えると、ドイツ鯉という呼び名が一般的であったと推察できる。

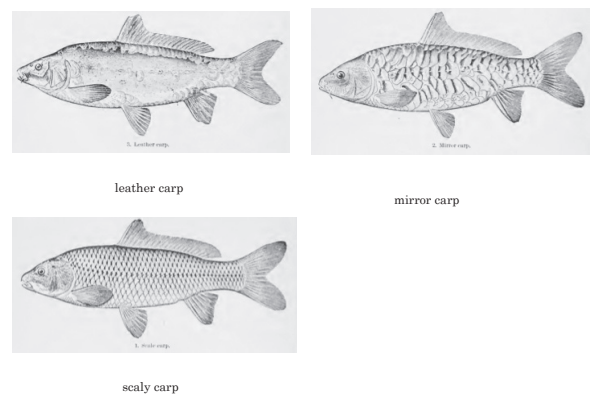


図3 20世紀初頭のアメリカで認識されていた主なドイツ鯉の種類(Cole(1905)³³⁾から転載)

ドイツ鯉がアメリカに正式に輸入されたのは1877年である³⁴⁾。東海岸における水産物の獲れ高の減少に危機感を抱いたアメリカ政府は、1871年にUSFCを設立した³⁵⁾。当初は海洋水産資源の枯渇対策を議論していたが、そのうちに海水魚以外で食用に適した魚種を探す議論へと発展し、内水面養殖業にも目が向けられるようになった。数多くの魚種が養殖魚の候補として挙げられたが、狭い水域で育てることが可能で、鱗が少なく下処理が楽だという理由から、royal carp (*C. rex-cyprinorum*) と leather carp が候補の中に入った³⁶⁾。USFCがドイツ鯉の内水面養殖を推したのは、アメリカの内陸部の住民、特に南部の住民³⁷⁾の収入に充てられる可能性があったからである。この時点では、ドイツ鯉が養殖池から河に逃げ、他魚種の生育を脅かすほどの存在になるとは誰も予想していなかった³⁸⁾。

アメリカ国内でドイツ鯉の養殖を広める動きは、民間の養殖業者の間でもみられた。ドイツ系移民のStilabowerはインディアナ州エディンバラ市で20エーカーの鯉養殖場を営んでおり、この施設は19世紀末のアメリカにおいて最大規模を誇っていた³⁹⁾。Stilabower(1886)は、鯉養殖を始める上での注意点と鯉の肉質を良くする方法をまとめた『鯉の歴史と鯉養殖ガイド』という指南書を出版した。この著書には、ドイツ鯉は澄んだ水の中で育て良質の餌を与えないと「肉がカビくさくなる」⁴⁰⁾、鱗と皮を剥ぐには「鯉を新しい灰に数分間包む」⁴¹⁾のが簡単、純粋なドイツ鯉は骨が少なく骨の多い鯉はアメリカの魚種とのハイブリッド⁴²⁾というように、鯉に馴染みの少ないアメリカ人が理解できるように書かれていた。

しかし、アメリカ一般市民の間で鯉肉の需要が拡大される兆しは見られなかった。ドイツ鯉の巨大な容姿から「化け物鯉」(monster carp)と虐げられ、新聞の紙面には大きな鯉(例えば体長3フィート、4歳児の大きさ、重さ30~40ポンド)の漁獲を競う記事⁴³⁾が掲載された。また、大量繁殖した鯉が他魚種の生態系を脅かすと、新聞が鯉バッシングを繰り広げた⁴⁴⁾。1901年、アメリカ政府は遺伝子学者で鳥類研究家のColeにドイツ鯉の生態系、経済的利用価値、アメリカ市民の鯉肉に対する受容度についての調査を依頼した。Cole(1905)がアメリカ国内で鯉を食する人口を調べたところ、五大湖の近隣に住むドイツ系住民や東海岸のユダヤ系住民は食すものの、その他のアメリカ人は鯉肉を好んで食さなかった⁴⁵⁾。またCole(1905)は「鯉肉の泥臭さを嫌うアメリカ人が多いが、泥水で育った鯉でも澄んだ水のなかで泳がせておけば泥臭さが消えることを知らないアメリカ人が多い」⁴⁶⁾と、鯉肉を適切に処理して

いない業者が多数いることを明らかにした。

さらに、ドイツ鯉の偏見がアメリカの一般市民の間で広く浸透している最中に鯉肉の市場をつくるのは難しい⁴⁷⁾、とCole(1905)は記した。確かに、20世紀初頭の新聞では、鯉は東海岸で食べる「珍味」(delicacy)⁴⁸⁾として紹介されることもあったが、アメリカの一般市民が積極的に購入しているようではなかった。誰も食べないためか、漁獲された鯉は刑務所で無料で配給されることもあった⁴⁹⁾。一方、Altoona Tribune(1914)によると、ドイツ鯉の漁業者は、ロシア産のキャビアの需要が高いことに目を付け、ドイツ鯉の卵をキャビアに加工販売することを計画した⁵⁰⁾が、成功したかについては記されていない。

このように、アメリカの一般市民の間で否定的に受け止められていた鯉肉であるが、1910年代になるとアメリカ政府が鯉肉の消費拡大に取り組み始めた。その理由は、牛肉、豚肉、鶏肉の価格が高騰した時の安価なタンパク源として確保できるからである。1911年にアメリカ政府は「鯉を食べて!」というポスターを作成し「目立つところに張ってください」⁵¹⁾とのヘッダーを付けて鯉食普及の推進を図った。「アメリカ漁業局が何の種類の魚だか分からなくして鯉を調理するベストな方法を模索している」⁵²⁾と揶揄する新聞もみられた。

第一次世界大戦中になると、アメリカ政府は魚食をさらに推進した。ドイツ鯉を含む淡水魚が牛肉、豚肉、鶏肉の代わりにタンパク源になるからである。インディアナ州狩猟漁業委員会は、湖沼に生息する魚種と個体数を調査し、淡水魚が重要なタンパク源として利用可能であると報じた⁵³⁾(図4)。



図4 淡水魚の資源量調査をするインディアナ州狩猟漁業委員会 (Greenough (1917)⁵⁴⁾から転載)

ドイツ鯉がアメリカに移入された歴史を振り返ると、鯉は一貫してモノとして取り扱われてきた。1870年代後半のドイツ鯉は、貧困農家を救う経済的利用価値のある水産

物として好意的に受け止められていた。1890年代になると、アメリカの在来魚の生態系を脅かす外来種、淡水漁業者にとっては漁に邪魔なゴミとして認識されるようになった。当然、水産流通物としての価値は下がった。ところが、ドイツ鯉の栄養価が高く、代替タンパク源として有用なことから、アメリカ漁業局は鯉を食するようにアメリカ市民に勧めた。魚価を上げるために、中西部の養殖業者は鯉肉や鯉の卵のブランド化を図ったが芳しくなかった。このようにドイツ鯉は、関係者の視点によって食糧品として扱われることもあれば、ゴミとして扱われることもあったのである。

3 第一次世界大戦の勃発と反ドイツ感情の台頭

ドイツ鯉の「ドイツ」という形容詞に着目すると、同時期のドイツ系住民を取り巻く政治環境の変化も考慮する必要がある。第一次世界大戦の勃発の引き金となったのは、オーストリア＝ハンガリー帝国の皇太子夫妻が暗殺されたサラエボ事件である。この事件の一ヶ月後の1914年7月28日に、オーストリア＝ハンガリー帝国がセルビアに宣戦布告をした。当初、アメリカは中立的な立場を貫き、戦争には関与しない姿勢を示していた。ところが1915年5月7日に、ドイツ海軍潜水艦のUボートがイギリス船籍の客船ルシタニア号に魚雷攻撃し、128名のアメリカ人旅行者が死亡したこと、翌年の3月24日にはフランスの定期連絡船サックス号をドイツ潜水艦Uボートがドーバー海峡で撃沈し、アメリカ人の乗客が負傷したことなどから、アメリカがドイツに対して強硬姿勢を見せるようになった。アメリカ参戦の決定打となったのは、1917年1月16日のツィンメルマン電報事件であった。これはドイツ帝国の外務大臣アルトゥール・ツィンメルマンがメキシコ政府に送った暗号文をイギリスが傍受することで明るみにでた。電報には、ドイツ帝国がメキシコと同盟を結ぶ意思があること、そしてアメリカ合衆国が参戦した場合、ドイツはテキサス州、ニューメキシコ州、アリゾナ州をメキシコに返還することを約束すると記されていた⁵⁵⁾。

ドイツ帝国による度重なる攻撃ともとれる行為への報復措置として、アメリカ政府は議会の承認を受けて1917年12月7日にドイツ帝国に宣戦布告した。第一次世界大戦は1918年11月11日にドイツ帝国が降伏するまで続き、1919年6月28日のベルサイユ条約が締結されることで正式な終戦を迎えた。1921年にはオーストリア、ドイツ、ハンガリーとアメリカ政府との間で平和協定が結ばれた⁵⁶⁾。

1910年代から1920年代のアメリカ社会は、ドイツ系ア

メリカ人にとって肩身の狭いものであった。それまでのドイツ系移民とドイツ系アメリカ人は、アメリカ社会で主要な構成員としての立場を確立していた。1880年代には約150万人ものドイツ人がアメリカに移住し、1882年の移住者数だけでも250,000人もいた。同時期には、ドイツ系アメリカ人（アメリカ生まれ）の数が約280万人にものぼり、そのほとんどは中西部のシンシナティ市、ミルウォーキー市、セント・ルイス市に住んでいた。アメリカ国内で発刊されたドイツ語の新聞や雑誌は800誌もあった⁵⁷⁾。

ところが第一次世界大戦の開戦に伴い、ドイツ系を取り巻く環境は一変した。祖国ドイツとアメリカとの政治関係が悪化することで、アメリカ国内で反ドイツ感情が噴出し始めた。アメリカの国民感情を刺激し、ドイツ系はアメリカ社会で自らを不可視化することを余儀なくされた。公共の場でドイツ語の使用、ドイツ語の出版物の刊行、ドイツ団体が主催する会合を慎むようになった。教会ではドイツ語でのミサを廃止し、全てを英語で行うようになった。アメリカ政府への忠誠心を示す行為として、ドイツ系の音楽家はバッハやベートヴェンの曲を弾かなくなったとも言われている⁵⁸⁾。

アメリカ政府による直接的な弾圧行為も影響した。ウィルソン政権はアメリカ一般市民の士気を高めるために、マスメディアを利用した。アメリカ政府による新聞メディアに対する検閲があったためか、ドイツ鯉、麻疹(German measles)、洋白(German silver)、ジャーマンポテト(German fried potatoes)という「ドイツ」を形容詞にする言葉は必要ない⁵⁹⁾というプロパガンダを載せる新聞もみられた。

その一方で、ドイツ系に対する同化圧力を疑問視するものもみられた。オレゴン州の新聞には、ドイツ麻疹の代わりに「自由の麻疹」(liberty measles)という造語の使用を諷刺する記事が掲載された。「病名を変えても病状は変わらない」⁶⁰⁾という結び文句には、表記を変えても病気の本質は変わらないとの皮肉が込められている。つまり、アメリカ政府が表面上の検閲活動を行ったとしても、ドイツ系住民を取り締まるのは難しいだろうとみていたのだ。また、カンザス州の新聞に掲載された記事には、ジャーマンポテトを頼んだモンタナ州の男性が非難されたことが記されていた。その記事の文末には「次はドイツ鯉を偶然釣った人がリンチに合うかもしれない」⁶¹⁾と書かれており、他者による過度の検閲行為に警鐘を鳴らしていた。

一般市民の間で「ドイツ」に係る言葉の自己検閲や他者検閲が行われたのには、もう一つの理由があった。アメリカ政府に対するスパイ活動の容疑をかけられて逮捕される

ドイツ系アメリカ人が数多くいたためである。あらぬ疑いをかけられないようにと、ドイツ系の氏名をアメリカ的な名前に変える(シュミットをスミスに改名)者もいた⁶²⁾。1918年2月になると、ドイツ国籍保持者は敵性外国人として警察当局や郵便局での登録が求められた⁶³⁾。ドイツ系アメリカ人の中には、アメリカ国内のインターンメント・キャンプに収容される者もいた(図5)⁶⁴⁾。



図5 ホットスプリング市のドイツ人のインターンメントキャンプの様子(The Topeka State Journal (1918)⁶⁵⁾から転載)

アメリカ政府のドイツ系に対する迫害ともとれる行為を報じる新聞もあったが、近隣住民の中にドイツのスパイがいるかもしれないと注意を促す人達もいた(図6)⁶⁶⁾。軍事スパイ、爆破担当者、政治的な活動家、病原菌をばらまく人、組織的普及活動に係わる人、平和主義者などを例に挙げ「機密情報部によれば、アメリカ国内には250,000人のドイツ人のスパイ」が在住し、ホーネンツォレルン(Hohenzollern)諜報組織の構成員の20%が魅力的な女性で、90%はアメリカ市民であると報じた⁶⁷⁾。



図6 アメリカ国内にいる6種類のドイツ人スパイ(The Wichita Beacon(1918)⁶⁸⁾から転載)

このように、アメリカ国内に在住するドイツ系住民が社

会の脅威であると新聞で報じることで、アメリカ政府は一般市民からの密告を期待していたのである。また、戦時の興奮状態を煽り上手く利用することで、アメリカ市民の士気を高めようとする狙いがあったとも考えられる。「ドイツ」という形容詞に敏感に反応する社会情勢を作り、反ドイツ感情を盛り立てることで、アメリカというナショナル・アイデンティティを強化することを図ったのであろう。

4 War on German Carp - ドイツ鯉の表象の変化

このような政治情勢のなか、経済的利用価値のない害魚として扱われていた「ドイツ鯉」だが、同時期には「対ドイツ鯉戦争」(War on German Carp)という論争が繰り広げられた。第一次世界大戦にアメリカが参戦すると、ドイツ鯉そのものがドイツ皇帝の家臣であるかのように表象されるようになった。ドイツ鯉はドイツ系住民の化身であるかの扱いを受け、アメリカの価値体系をゲルマン化(Germanize)する恐れのある存在と表現されるようになった。例えば「ドイツ鯉がイギリス鱒にスパイ行為」⁶⁹⁾という記事が掲載されたが、この背景にはアメリカ国内で多数のドイツ人スパイが摘発されたことも関係していると考えられる。この他にも、ドイツ鯉ではなく「ドイツ皇帝鯉」(Kaiser carp)⁷⁰⁾「フン族鯉」(Huns carp)⁷¹⁾「チュートン人風」(Teutonic Flavor)⁷²⁾など、ドイツ人を蔑視する表現を用いて、ドイツ鯉を表すのが散見された。

4-1 アメリカ参戦のプロパガンダ

まず、ドイツ鯉を掲載する意図にはアメリカの参戦のプロパガンダとしての役割がみられた。記事のタイトルの中には「戦争に勝つために鯉を食べよう」⁷³⁾と書かれたものなどがあり、アメリカの参戦を正当化し、アメリカ市民の士気を鼓舞していたと解釈できる。

記事1 1918年4月8日

「ドイツ鯉は鯉にとって良い名前だ。なぜなら、他の魚をも滅ぼしているからである。大半のドイツ人化け物のように、[ドイツ鯉の]逮捕令状に署名された^{74,75)}。

記事1が掲載された頃は、ドイツ人が敵性外国人としてアメリカ政府機関で登録することが義務付けられた時期である。アメリカ国内にはドイツ人のインターンメント・キャンプが設営されており、ドイツ鯉の駆除活動と、ドイツ人の逮捕者とを結びつけた表現である。

2つ目の特徴としてはドイツ鯉をドイツ潜水艦Uボートに擬える記事がみられる。1915年のドイツ海軍潜水艦によるイギリス客船撃沈事件は、アメリカ市民に衝撃を与えた。この事件以降、ドイツ鯉をUボートに擬える記事は多数みられた。戦時中、「ドイツ」という言葉を使用されることは憚られるようになった。記事の中には、ドイツ鯉ではなく「Uフィッシュ」と改名されるだろうという内容もみられた⁷⁶⁾。

記事2 1918年9月30日

「鯉であって、潜水艦ではない」

ミシガン州ユニオン市西部の住民はセント・ジョセフ河で武装したドイツ潜水艦が目撃されたとの知らせを受け恐怖に慄いたが、実はドイツ鯉だった。男性住民は銃床でドイツ鯉を殴り殺し自宅に持ち帰った。ドイツ鯉は85ポンド [38.5kg] の重さだった⁷⁷⁻⁸²⁾。

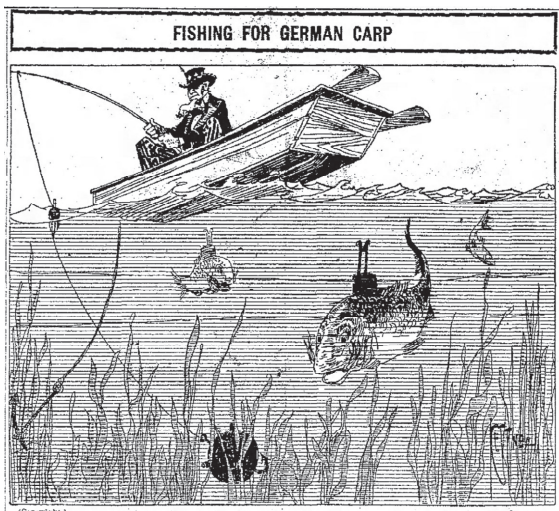


図7 ダイナマイトでドイツ鯉を釣るアンクル・サム (The Alton Democrat (1917)⁸³⁾ から転載)

記事2と図7から、アメリカ国内でもドイツ軍による攻撃がドイツ鯉という形で進行していることを物語っている。ドイツ鯉の数が増えて在来魚が獲れなくなると「ドイツ人の祖国から移送されたドイツ鯉は、我々の自由な在来魚と同じ水中に入れられると…地球上の水域を自らの支配下におくという傾向を見せた」⁸⁴⁻⁸⁶⁾と世界征服を成し遂げようとするドイツ帝国と、在来魚の生育を脅かすドイツ鯉とを結びつけた。このように、アメリカ参戦の支持を高めようとするプロパガンダとしてドイツ鯉の表象は利用されたのである。

4-2 愛国的な姿勢

アメリカに対する愛国的な姿勢を表す記事も多くみられた。例えば、インディアナ州スー市でギリシャレストランを営む Roumeliote の愛国心の表し方が話題になった。彼のギリシャレストランの窓際にはドイツ鯉が飾られていた。そのため、地元の住民は Roumeliote がドイツ帝国の支持者だと疑っていた。しかし、バルカン戦争の退役軍人でもあった彼は、魚を一匹ずつ取り出し、それぞれを星条旗で包んで窓際に置いて飾った。すると、周辺住民からは愛国的な行為だと好意的に受け止められた。これがレストランの宣伝効果に繋がり、彼のレストランの売り上げが倍増した⁸⁷⁻¹⁰⁰⁾とのことだった。この記事の特筆すべき点は、中西部だけでなく、カリフォルニア州、ノースカロライナ州、ノースダコタ州、テキサス州と、ほぼ全米各地で取り上げられたことである。

この他にも、魚を品種改良し星条旗の魚をつくったとの記事も掲載されていた。

記事3 1919年7月7日

「赤・白・青の魚— ジャージー市のブリーダーの最近の発明」

戦争によって、ジャーマンフライドポテトが自由のポテトになり、ザワークラウトが自由のキャベツになった。今度は、ジャージー市の住民がドイツ鯉の代わりに自由な金魚を発明した。W, F, Heddin がこの新しい魚種の生産者である。彼は、赤フェダイ (red snapper), アミキリ (bluefish), ヒトデ (starfish) の掛け合わせであること否定しているが、もう少し大きいサイズの魚をつくる時に試してみると言っている。彼が言うには、赤い金魚、茶色い金魚、黒い金魚でごまかしたようだ。新たな愛国心の魚の体つきは赤く、白い尾びれと背びれがあり、背にそった横側には青い線が入っているとのことだ^{101,102)}。

実際上記のような品種改良が成功したかは定かではないが、「赤・白・青・星」という星条旗をモチーフにした魚をつくるという行為を報じること^{103,104)}は、アメリカ社会で愛国心が高揚していた表れである。「赤・茶・黒」の金魚は多民族国家のモチーフであることや、魚のハイブリッドが星条旗の魚だという表現は、第一次世界大戦の勝利はアメリカ全国民の一致団結によって得られた成果だというメッセージとしても解釈できる。

4-3 反ゲルマン化

「漁業者はドイツ鯉の名で売らなければ、もう少し鯉が売れるかもしれない」¹⁰⁵⁾「戦時中なので、これ以降ドイツ鯉をラフォレット鯉と呼ぶこと」¹⁰⁶⁾「どの鯉もゲルマン化するべきではない」¹⁰⁷⁾と、アメリカ社会からドイツ的要素を排除すべきだとの語勢の強い発言が、第一次世界大戦のアメリカの新聞にはみられた。

記事4 1918年9月18日

「ドイツ鯉はもういない」

魚でさえもドイツという名前に嫌悪感を抱いている。ドイツという名は、フン族の方法を用いて、アメリカ人の中に巧みに刷り込まれた洗練された偏見である。この魚の名前は巧みに全ての話題から消し去られ、今は代わりに自由の鯉と言う¹⁰⁸⁾。

記事5 1918年7月15日

「魚はドイツ派なのか？肉の代わりに必要な時に限って獲れない」

[イリノイ州]アルトン郡の漁業者はミシシッピ河とミズーリ河のドイツ鯉はドイツ思想に傾倒していると信じている。ドイツ鯉の「ドイツ」部分は削除され(そのように見える)、ドイツ鯉は兵役忌避者である。しかし、魚が姿を現さないようなら、漁業者はすぐに魚を訴えるつもりようだ。河漁師にとってドイツ鯉が頼みの綱だ。現在[牛などの]肉の代わりに魚の需要が高まっている。供給可能な肉の注文を受注しなかったところ、魚への需要が高まった。「我々の知る限りのあらゆる努力をした。だが、魚が獲れない。」と1人の漁師は言った¹⁰⁹⁾。

反独プロパガンダとも読み取れるが、記事4ではドイツ鯉も「ドイツ」という言葉を嫌がっていると記されており、記事5では食糧として必要な時に漁獲できないことを、あたかもドイツ鯉の意思によって漁師を困らせているかのようだと言われている。このことから、当時のアメリカ人が抱く「ドイツ系」という概念の中には、従属性や従順性という特性がなかったことが推察できる。

このように「ドイツ鯉」に関する論争には3つの特徴がみられる。1つ目は、アメリカ経済を支える水産資源としてのドイツ鯉である。このパースペクティブに則ると、有用な水産資源から不要(用)な有害魚へと転落した経緯か

ら、人間が利用価値を見いだすモノとしての観点から議論が進められている。2つ目は、アメリカの日常生活に浸透したドイツ的要素をドイツ鯉に投影することで、反独プロパガンダとして、アメリカ人の意識の中に刷り込む役割である。第一次世界大戦が勃発するまでのドイツ系アメリカ人に対する他のエスニック集団の感情は明らかではないが、アメリカ社会のゲルマン化を嫌悪する表現行為は、アメリカのナショナル・アイデンティティの枠組みを再編成する行為とも捉えられる。3つ目は、人間を弄ぶ自然という観点である。個々人の解釈によって異なると思われるが、ドイツ鯉の漁獲量の増減、他魚種に対する予想外の影響力など、ドイツ鯉は人間の支配下に収まりきらなかった。ドイツ鯉にあたかも主体性があるかのように表現することで、人間と対等に渡り合うドイツ鯉を諷刺すると同時に、人間の無力さをも示唆しているのである。

おわりに

1919年に第一次世界大戦は正式に終了したが、ドイツ鯉との戦いはそれ以降も続いていた。1920年以降、ドイツ鯉はスポーツフィッシュの敵として取り上げられるようになった¹¹⁰⁾が、アメリカ社会の価値観を脅かすというよりは、遊漁業者や淡水漁業者の経済的負担をかける対象へと変化していった。つまり、ドイツ鯉をドイツ人の化身として擬人化し、敵国ドイツの批判として直接受け止められた時期は、第一次世界大戦期に限られている。その要因として考えられるのが、第一次世界大戦中のドイツ人に対するアメリカ政府と一般人による検閲行為と抑圧行為、戦争時にみられる国民の興奮状態、ドイツ鯉が本来持ち合わせた雑食性、繁殖力の高さ、巨大さ、生命力の強さなどである。

この論争の中ではアメリカ政府のジレンマがみられる。政府としては戦争の士気を高めるために、アメリカ社会からドイツ的要素を排斥する動きを強めたいと願いつつも、戦時中の食糧危機からドイツ鯉を含めた淡水魚を食すること、アメリカ人の自宅の庭でドイツ鯉を飼って食糧として備えること¹¹¹⁾を推進せざるを得なかった。「ドイツ鯉」の「ドイツ」の部分強調するか、それとも「鯉」の部分強調するかは、その時代の政治・社会情勢によって変化するものであり、周りのステークホルダーの対処法によっても変わるものであろう。

現在、アジア鯉の表象の仕方がアジア系移民を蔑視する行為であるとの批判があがっているが、第一次世界大戦期

のドイツ鯉にも同様の傾向がみられる。この問題に取り組む際に、アメリカのマジョリティ集団であるドイツ系住民でさえも排斥の対象になったことを念頭に置く必要がある。アメリカで外来生物を人種化・民族化するという行為は、マイノリティ集団だけに限られず、主流派のドイツ系移民にも行われたのである。つまり、人間を含めたあらゆる渡来生物を、出身国別で類型化する認識方法そのものが、移民国家としてのアメリカ的価値観の土台を物語っていると解釈できる。

謝 辞

水産大学校教育研究費活性化推進費(平成24年度、平成25年度)からの助成のもと、本研究を遂行しました。心よりお礼申し上げます。

引用文献

- 1) Smallwood WM, Smallwood ML: The German Carp, and Invited Immigrant. *The Science Monthly*, **29**, 394 (1929)
- 2) Shinozuka JN: Deadly Perils: Japanese Beetles and the Pestilential Immigrant, 1920s – 1930s. *American Quarterly*, **65**, 838,845 (2013)
- 3) Shinozuka JN: Deadly Perils: Japanese Beetles and the Pestilential Immigrant, 1920s – 1930s. *American Quarterly*, **65**, 838,845 (2013)
- 4) Shinozuka JN: Deadly Perils: Japanese Beetles and the Pestilential Immigrant, 1920s – 1930s. *American Quarterly*, **65**, 844 (2013)
- 5) Coates P: American Perceptions of Immigrants and Invasive Species: Strangers on the Land, University of California Press, Berkeley, 5 (2006)
- 6) Coates P: American Perceptions of Immigrants and Invasive Species: Strangers on the Land, University of California Press, Berkeley, 5 (2006)
- 7) Kelly AM, Engle CR, Armstrong ML, Freeze M, Mitchell AJ: History of Introductions and Government Involvements in Promoting the Use of Grass, Silver, and Bighead Carps. *American Fisheries Society Symposium*, **74**, 2 (2011)
- 8) Kelly AM, Engle CR, Armstrong ML, Freeze M, Mitchell AJ: History of Introductions and Government Involvements in Promoting the Use of Grass, Silver, and Bighead Carps. *American Fisheries Society Symposium*, **74**, 7-8 (2011)
- 9) Executive Office of the President: Obama Administration Releases 2013 Asian Carp Control Strategy Framework. *Council on Environmental Quality*, (July 24, 2013)
- 10) Fraizer I: Fish Out of Water: the Asian Carp Invasion. *The New Yorker*, (October 25, 2008)
- 11) Van Winkle K, Gilpin L: Fight Against Carp Still Targeting the Chicago River. *Medill Reports Chicago*, (March 13, 2013)
- 12) Brummel R: Mobilizing Space: Examining Mobility, Identity, and Boundary in the Politics of Asian Carp. *Journal of Environmental Studies and Sciences*, 1-5 (2011)
- 13) Chumley CK: Minnesota Renames the ‘Asian Carp’ to Avoid Hurting Asians’ Feelings. *The Washington Times*, (June 23, 2014)
- 14) Cronin M: In Nod to Cultural Sensitivity, Minnesota Considers Renaming Asian Carp to ‘Invasive Carp’ . *StarTribune*, (March 27, 2014)
- 15) Boyd C: Asians Fastest-growing Ethnic Group in Minnesota. *Minnpost*, (June 8, 2013)
- 16) American Immigration Council: New Americans in Minnesota: The Political and Economic Power of Immigrants, Latinos, and Asians in the North Star State., 1-5 (2015)
- 17) Nederveen Pieterse J: White on Black: Images of Africa and Blacks in Popular Culture, Yale University Press, New Haven (1992).
- 18) Nederveen Pieterse J: White on Black: Images of Africa and Blacks in Popular Culture, Yale University Press, New Haven (1992).
- 19) Hall S: Race and Ideology. *In: Marris P, Thornham S (eds) Media Studies: A Reader*. Edinburgh University Press, Edinburgh, **161** (1997)
- 20) Hall S: Race and Ideology. *In: Marris P, Thornham S (eds) Media Studies: A Reader*. Edinburgh University Press, Edinburgh, **168** (1997)
- 21) Hall S: Race and Ideology. *In: Marris P, Thornham S (eds) Media Studies: A Reader*. Edinburgh University Press, Edinburgh, **162** (1997)
- 22) Chavez LR: Covering Immigration: Popular Images and the Politics of the Nation. University of California Press, Berkeley (2001)
- 23) Bernays EL: The Marketing of National Policies: A Study of War Propaganda. *J Marketing*, **6**, 236 – 244 (1942)
- 24) Welch D: Propaganda for Patriotism and Nationalism.

- British Library, London (2013)
- 25) Cook I: Propaganda as a Weapon? Influencing International Opinion. British Library, London (2013)
- 26) von Hoenbroech PK: Das englische Raubtier. British Library, London (1919).
- 27) Ribeiro N: Using a New Medium for Propaganda: The Role of Transborder Broadcasts during the Spanish Civil War. *Media, War and Conflict*, **7**, 37 – 50 (2014)
- 28) Griffin M: Media Images of War. *Media, War and Conflict*, **3**, 7-41 (2010)
- 29) Cole, LJ: *The German Carp in the United States*. Government Printing Office, Washington, **539** (1905)
- 30) Cole, LJ: *The German Carp in the United States*. Government Printing Office, Washington, **540** (1905)
- 31) McPherson WM: Another Profit from Artesian Wells. *Los Angeles Herald*, **2** (December 28, 1875)
- 32) Cole, LJ: *The German Carp in the United States*. Government Printing Office, Washington, plate **1** (1905)
- 33) Cole, LJ: *The German Carp in the United States*. Government Printing Office, Washington, plate **1** (1905)
- 34) United States Commission of Fish and Fisheries: Part VI. Report of the Commissioner for 1878. Government Printing Office, Washington, (1880)
- 35) United States Commission of Fish and Fisheries: Part II. Report of the Commissioner for 1872 and 1873. Government Printing Office, Washington (1874)
- 36) United States Commission of Fish and Fisheries: Part II. Report of the Commissioner for 1872 and 1873. Government Printing Office, Washington, lxxxvi (1874)
- 37) United States Commission of Fish and Fisheries: Part V. Report of the Commissioner for 1877. Government Printing Office, Washington (1879)
- 38) Cole, LJ: *The German Carp in the United States*. Government Printing Office, Washington, **525** (1905)
- 39) n.a.: Indiana Happenings: Minor State Items. *The Monroeville Breeze*, **6**(September 5, 1889)
- 40) Stilabower V: History of Carp and Carp Culturist' s Guide, E. M. Hardy Printer, Indiana, **9** (1886)
- 41) Stilabower V: History of Carp and Carp Culturist' s Guide, E. M. Hardy Printer, Indiana, **49** (1886)
- 42) Stilabower V: History of Carp and Carp Culturist' s Guide, E. M. Hardy Printer, Indiana, 15-16 (1886)
- 43) n.a.: Personal and Pertinent: A Monster Carp. *The News*, **3** (June 29, 1889)
- 44) Cole, LJ: *The German Carp in the United States*. Government Printing Office, Washington, **525** (1905)
- 45) Cole, LJ: *The German Carp in the United States*. Government Printing Office, Washington, **604, 607** (1905)
- 46) Cole, LJ: *The German Carp in the United States*. Government Printing Office, Washington, **604** (1905)
- 47) Cole, LJ: *The German Carp in the United States*. Government Printing Office, Washington, **606** (1905)
- 48) n.a.: Sell Chicago Fish as Delicacy in East. *The Inter Ocean*, **3** (March 28 1909)
- 49) n.a.: Inmates in Illinois Institutions Enjoy Fish. *The Daily Journal-Gazette*, **5**(December 31, 1917)
- 50) n.a.: Carp as Caviar. *Altoona Tribune*, **8** (January 7, 1914)
- 51) U.S. Bureau of Fisheries, Department of Commerce: Eat the Carp!. *The National Archive Catalog*, 5710027(1911)
- 52) n.a.: Cheaper Foods. *The Indianapolis News*, **6** (November 19, 1917)
- 53) Greenough, WS: Fish, A Tremendously Big Food Supply in Indiana That Has Been Almost Overlooked, Now Attracting Attention as a Valuable Resource in War. *The Indianapolis News*, **15** (September 8, 1917)
- 54) Greenough, WS: Fish, A Tremendously Big Food Supply in Indiana That Has Been Almost Overlooked, Now Attracting Attention as a Valuable Resource in War. *The Indianapolis News*, **15** (September 8, 1917)
- 55) Office of the Historian: U.S. Entry into World War I, 1917. (n.d.)
- 56) Office of the Historian: Wilson' s Fourteen Points, 1918. (n.d.)
- 57) European Division: The Germans in America. The Library of Congress, Washington (2014)
- 58) University of Tampere: German-Americans and World War One. (2013)
- 59) n.a.: Hints and Dints: We Have No Use for. *New Castle News*, **4** (May 18, 1918)
- 60) Hutchinton W: How to be Healthy. *The Oregon Daily Journal*, **10** (June 27, 1918)
- 61) n.a.: When You and I Were Young Maggie. *The Salina Daily Union*, **4** (April 21, 1917)
- 62) University of Tampere: German-Americans and World War One. (2013)
- 63) n.a.: Alien Enemies Register. *French Broad Hustler*, **8**

- (January 24, 1918)
- 64) n.a.: Pictures of the Great War – Have your Children Paste Them in a Scrapbook. *The Topeka Daily State Journal Saturday Evening*, **8** (February 2, 1918)
- 65) n.a.: Pictures of the Great War – Have your Children Paste Them in a Scrapbook. *The Topeka Daily State Journal Saturday Evening*, **8** (February 2, 1918)
- 66) Cook M: Six Different Kinds of German Spies Are Operating in the U.S. *The Witchita Beacon*, **10** (March 25, 1918)
- 67) Cook M: Six Different Kinds of German Spies Are Operating in the U.S. *The Witchita Beacon*, **10** (March 25, 1918)
- 68) Cook M: Six Different Kinds of German Spies Are Operating in the U.S. *The Witchita Beacon*, **10** (March 25, 1918)
- 69) n.a.: German Carp Spies on English Trout: Bill Taylor Has Remarkable Luck Fishing Because of the War in Europe. *The Washington Post*, **3** (May 23, 1915)
- 70) Crete Vidette-Herald: Our Voracious Kaiser Carp. *The Lincoln Star*, **6** (July 8, 1917)
- 71) n.a.: No Hun Carp For Him: Emmet Farmer Rids His Pond of Unpopular Specimens. *Trenton Evening Times*, **3** (September 5, 1918)
- 72) n.a.: Carping Critics Justified in This Instance. *The Leavenworth Times*, **3** (June 21 1918)
- 73) n.a.: Eat Carp To Win War. *The San Bernardino News*, **3** (December 6, 1917)
- 74) n.a.: War to the Death Declared Upon All German Carp in Maine. *The Washington Times*, **2**(March 13, 1918)
- 75) n.a.: Dooms Fish Submarine. *San Bernardino News*, **2** (April 8, 1918)
- 76) The Pharos Reporter: n.t. Logansport Pharos-Tribune, **6** (March 14, 1918)
- 77) n.a.: Carp, Not a Submarine. *Lead Daily Call*, **5** (September 30, 1918)
- 78) n.a.: Carp, Not a Submarine. *The Oneonta Star*, **4** (July 8, 1918)
- 79) n.a.: Carp, Not a Submarine. *The Reidsville Review*, **3** (July 9, 1918)
- 80) n.a.: Carp, Not a Submarine. *Rouge River Courier*, **2** (July 10, 1918)
- 81) n.a.: Carp, Not a Submarine. *Mount Carmel Item*, **11** (July 11, 1918)
- 82) n.a.: Carp, Not a Submarine. *The Democratic Banner*, **2** (July 19, 1918)
- 83) n.a.: Fishing for German Carp. *The Alton Democrat*, **1** (June 23, 1917)
- 84) n.a.: Fishing. *Harrisburg Telegraph*, **9** (June 24, 1918)
- 85) n.a.: Kaiser Carp Are Terrors of Illinois Waters. *Lebanon Daily News*, **7** (July 8, 1918)
- 86) n.a.: Fishing. *The Fort Wayne Journal-Gazette*, **14** (June 26, 1918)
- 87) n.a.: Decks German Carp With Flags. *The Burlingame Enterprise*, **8** (January 10, 1918)
- 88) n.a.: Decks German Carp With Flags. *Steuben Republican*, **5** (December 26, 1917)
- 89) n.a.: Decks German Carp With Flags. *Iowa City Press-Citizen*, **4** (December 26, 1917)
- 90) n.a.: Decks German Carp With Flags. *The Democratic Banner*, **8** (December 28, 1917)
- 91) n.a.: Decks German Carp With Flags. *The Burlington Enterprise*, **8** (January 10, 1918)
- 92) n.a.: Decks German Carp With Flags. *The Gettysburg Times*, **3** (January 10, 1918)
- 93) n.a.: Decks German Carp With Flags. *The Call-Leader*, **5** (January 14, 1918)
- 94) n.a.: Decks German Carp With Flags. *The Herald*, **4** (January 17, 1918)
- 95) n.a.: Decks German Carp With Flags. *New Oxford Item*, **3** (January 24, 1918)
- 96) n.a.: Decks German Carp With Flags. *The Daily Free Press*, **1** (January 26, 1918)
- 97) n.a.: Decks German Carp With Flags. *The Gastonia Gazette*, **4** (January 30, 1918)
- 98) n.a.: Decks German Carp With Flags. *Belvidere Daily Republican*, **6** (March 2, 1918)
- 99) n.a.: Revolution As a Policewoman. *Evansville Press*, **6** (February 16, 1918)
- 100) n.a.: Bits of Information. *The Bismarck Tribune*, **5** (February 16, 1918)
- 101) n.a.: Red, White and Blue Fish: Here's the Latest "Invention" of a Jersey Breeder. *Tyrone Daily Herald*, **7** (July 7, 1919)
- 102) n.a.: Liberty Goldfish Latest to Appear on the Market: Red, White and Blue Specimens of Finny Tribe Safe Since

- Country Is Dry. *Reading Times*, **1** (July 7, 1919)
- 103) n.a.: Red, White and Blue Fish Produced in New Jersey. *Kingsport Times*, **5** (July 11, 1919)
- 104) n.a.: You Must Admit That a Red, White and Blue Fish Beats Pink Elephant in the Matter of Color Display. *The Evening News*, **12** (August 15, 1919)
- 105) n.a.: British Government Helps Pay For Bread. *The Union Labor Record*, **3** (February 2, 1918)
- 106) n.a.: Business Chances. *Lawrence Dealer-World*, **7** (March 21, 1918)
- 107) Browder C: n.t. *Arkansas City Daily Traveler*, **5** (October 7, 1919)
- 108) n.a.: No More German Carp!. *Alton Evening Telegraph*, **5** (September 19, 1918)
- 109) n.a.: Are Fish Pro-German?: When They Are Most Needed to Replace Meat They Are Hardest to Catch. *Alton Evening Telegraph*, **1** (July 15, 1918)
- 110) n.a.: German Carp is Worst Foe of Game Fish. *The Ogden Standard Examiner*, **30** (April 16, 1922)
- 111) n.a.: Raise Fish in Back Yard is the Latest: Special to The Leader. *The Allentown Leader*, **7** (March 8, 1918)